

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2147 号

Psychological Characteristics of Children at Two Years after the Great East Japan Earthquake: Analyses of Telephone Consultation Records

東日本大震災 2 年後の小児の心理的特徴：電話相談記録分析

坂間 玲子（さかま れいこ）

博士（医学）

論文内容の要旨

2011 年の東日本大震災は、日本の歴史の中で最大規模の地震と津波による災害である。東北メディカル・メガバンク機構では、2012 年から 2015 年にかけて宮城県内の学校に在籍する子どもを対象に、疾病等の早期発見と予防を目的としてアンケート調査を実施した。アンケートは、子供たちの両親や保護者に回答してもらい、返信により同意を得たものとした。アンケート内容には、子供たちの心理的適応を予測する SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire) score に関する質問も含まれていた。本研究の目的は、2013 年に施行した調査をもとに、震災 2 年後の心理的特徴を把握し、適正なサポートにつなげることである。我々は、SDQ score > 16 点であり、かつ両親や保護者が希望した場合のみ心理士の電話相談を行った。宮城県県南全域(13 市町 117 校) に在籍する小学 2、4、6 年生、中学 2 年生の 12,742 名のうち、4,074 人から回答があり(回収率 32%)、そのうち 720 人の電話相談内容を対象とした。720 人中、301 人(42%)の子供、両親あるいは保護者が何らかの心因反応を訴えており、これらを”回復未達成群”として分類した。“回復未達成群”の中で 230 人が社会的サポートを受けておらず、長期的な心理的サポートの必要性があると考えられた。また、海岸沿いの学校に通っていた子供たちは、内陸と比較し、より高い心因反応を示すことが示唆された(27.1% vs 12.9%)。結果として、震災は子供たちに長期的な心理的影響を残す可能性があり、これらに対しての心理的サポートの必要性があると考えられた。